
羽根が黒く染まる闇

おごまめこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽根が黒く染まる闇

【Nコード】

N9378A

【作者名】

おごまめこ

【あらすじ】

純白の鳥が落とされたのは、浅黒い世界だった。染まることを望む彼と、抜け出したい彼女の、小さなファンタジー。

ブローグ

苦しい。

生まれて初めて手に入れた感情だ。

見慣れた暗闇はそこにはなくて

目の前には『世界』があるだけだった。

感情はその場でどんどん増殖していき、私を苦しめる。
心地よい闇が欲しい。

この白い羽根が黒く、黒く染まるような…

彼は、飛び立った。

#1・・・暗闇の親友。

人は満たされる為に生きているって誰かが言っていた。

その通りだと思う。

——じゃあ、私は何の為に生きているの？

夜、ベッドの中で一人考えるのはいつも同じ事。

苦勞というのは誰にも平等にある。

その大きさは違おうとも。

でも、苦勞すらない私に、欲望なんて、満足なんて、目指す事すら出来ないって知ってしまった。

3

私は裕福な家の生まれ。

代々伝わる名家で、それ故に私を縛るものは多かった。

女の子が生まれたのは、2百年振りのことだったらしい。

何故、それまで女の子が生まれなかったのか、私は疑問に思っていた。

でた答えは一つ。

産ませなかった。

『男子が生まれたら十分に愛を捧げ、教育を優先に熱心に育てる』
『女子が生まれたら最低限の礼儀作法を習わせたのなら、汚れのないまま成人まで育てよ。』

『不細工は一家の恥。処置は各々に任せる』

なんとという男尊女卑だろうと怒りを覚える人も居るかもしれない。
でも、それを根っこから植えられた人間にとっては、これが「常識」なのだ。

その人の世界と言うものは、自分で作り上げるもの。
でも、世界を構成する核は、自分では作れない。
核を否定することは出来ない。
それは自分自身だから。

でも、私は何で産まれたのか。
分からない。今までは産まずに下ろしていたはずなのに。

私は、幸か不幸か、人並み以上の容姿をしていた。
この家の人は、しきたりを守り、私に礼儀作法を詰め込むと、部屋に軟禁した。

そう、9歳の頃から。

それ以来、私の友達は、夜こっそり顔を出す月と目を瞑るとやってきてくれる、私が作った私の夢だけだった。

悲しくて、でも、涙も出ない。
雲で月が見えない夜は…

また、私の世界の中へ…

『ギイツ！！ギイツ！！ギイギイ！！！！！！』

ガタガタと窓を叩く音と、奇妙な泣き声が、私の目を開かせた。

そつとカーテンを開けてみる。

怖くなんかない。

怖いってのが分からないし。

月明かりと共に私の眼に写ったのは、純白の小さな鳥だった。

とても白くて とても白くて 苦しそうだった。

#2・・・親友を喰らうモノ。

月明かりに照らされて、窓に何度も突進するのは、純白の小鳥だった。

ガチャガチャとガラスは悲鳴をあげ、ギィギィと小鳥も負けじと悲鳴をあげる。

私は、窓を開けてみた。

バサバサツと羽根を撒き散らし、彼は入り込んできた。
そして忙しなく部屋中を飛び回る。

何がしたいんだろう？

すると突然、小鳥は正気を取り戻したかのように羽ばたきを緩め、私のほうへスーッと飛んできた。

いつも窓から見ていた鳥のソレより、全然綺麗だった。

彼は私の顔の前でパタパタと器用に羽根を動かしながら飛んでいる。
眼を逸らせない。視線を外せない。

どうすればいいかまったく分からない私は、ただ小鳥の動きを待つだけだった。

この鳥が例え悪魔の使者でも、私には関係ないのだから。
怯えて逃げる必要など、ないのだから。

『ああ、心地が良い。
なんだ、この少女は。』

冷たく、冷たく、冷たく、冷たい暗闇を受け入れている。

ああ、心地が良い。

苦しみだけの光よりも
惨劇だけの光よりも

ああ、心地が良い。

この女に 決めた。

小鳥は私の顔の前に浮いたまま、大きく羽根を広げた。
私の嫌いな色だ。

私の好きな色を壊すから、嫌いなだけなんだけど。

ん、背中がゾクゾクする。

あれ、目の前、真っ暗だ。

ああ、いつもの、暗闇だ。

眼を瞑ろう。

どうか、誰も、起こしませんように。

が
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

うまい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい

あははああはあああ

ぐひええ
ぐふつ
げふう

うまああああああああ

うまい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい

ああああああああああああああ

ああああああああああ

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•

我は……何を……？

いじは・・・？

我
は
・
・
・
？

#3・・・汚い花火

やっぱり、朝は来た。

私の体は正常のサイクルを果たし
眼をそつと開かせる。

日はもう高い。

ふと、背中にある違和感に気が付いた。

何気なく手で探ってみる。

「えっ?!」

私は急いで等身大の鏡の前に行き、服を脱いで自分の背中をみた。

は、羽根!?

そう、私の背中には、小さな、片翼5cm程の羽根が生えていたのだ。

「な、なに?こ、これ、大人の人は皆あったりするの...?で、でも、本で見た時はなかった・・・ハズ。」

じっくり考えて見る。

しかし、答えは出てこない。
必要な情報が圧倒的に足りないからだ。

「天使にでも、なるのかな。」

自分が言ったことに対して、私は笑ってしまった。

例え、この羽根が大きくなったって私は空には飛べないんだ。
空がないんだから。

『天使…？ふふ、お前のような女が、天の使いになど成れるとは思えないが。』

「?!」

ビククリして振り返る。

でも、わかってた。後ろに居ない事を。そして、唐突に理解した。
これは、私の中から聞こえてるんだ。
そして、その声の主も。

「…私の体に入り込んで、どうしようって考えなの？小鳥さん。」

『…驚かないのか？少々意外だな、普通は喚き、叫び、慌てふため
くのに。』

「…普通、ね。。なってみたいな、そういうの。」

『人生を諦めている様に見えるな。』

「諦めている以前に、始まってもないよ。」

『ほつ。いつ始まるんだ？』

「死んでから・・・かな。」

『クククツ・・・。』

「目的、聞かせてくれるかな？」

『何・・・少々お礼をな・・・しようと思っとな。くくくっ！！』

そう小鳥が言っていると私は今まで味わったことのない感覚に襲われた。

私の体が逃げていく。

私の中へ押し込められる。

排水溝に吸い込まれるように、ぐるぐる、ぐるぐると。

「うつ。」

「ふふ・・・中々の体・・・だな。さて・・・。」

気付けば私は私ではなかった。

私が見ている景色は、私の眼という窓から覗いてるようなものだ。

私は体を失ったらしい。

どうやって喋るのだろう。

さつきから声を張り上げているつもりだけど・・・せめて私の体にだけでも届かないものか。

思案を重ねていた時、私の声が私に響く。

トンネルの中にいるような残響音は、心地悪い。

「さあ。望むものをくれてやろうではないか。」

望むもの・・・？望むものがない私には、無理な話なのに。

今の私の体は完璧に『彼』のものになったらしい。

彼はクローゼットから適当な服を取り出し、着替えると、おもむろに部屋を出た。

周りをキョロキョロ詮索しはじめる。

すると、パタパタと音をたて、私の世話係がやってきた。

「お嬢様。お部屋をでてはなりません。お食事は後で私めが。」

彼は、無表情でいった。

「お前では、私の腹は満たせんよ。ふふ。」

無視して進んでいく彼を、彼女は制止しようとした。

「なりません！」

「うるさいぞ、蠅が。失せろ。」

彼女は、私が情緒不安定になったとでも思ったんだろう。

無言で駆けていった。

恐らく男の人を呼んでくるのだろう。

「くくつ。急がなければな。」

彼は足を速めた

私の体はどんどんと屋敷の奥へ進んでいく。私にとって何もかも初

めての景色だった。

私は、自分の家すら分かってなかったんだ。

むしように、悲しく、悲しくなった。

彼は立ち止まった。

眼の先にはシンプルながらも、素晴らしい輝きを持つ双剣が飾ってあった。

「ふふつ。。まあ、これでいいだろう。くくくつ。」

ゆつくりと双剣をとり、両方の腰に付けた。

同時に、先程のお世話係が男を数人連れてきた。

「お嬢様！！！！お部屋へ連れ戻させていただきます！」
体格の良い男が私の体の腕を掴む。

私は、彼は、酷い笑みを浮かべた。酷い、醜い笑みだ。

「さあ・・・願い、叶えるぞ！！！」

私の腕を掴んでいた3人の男から、鮮血の噴水があがった。
ガンガンガンと頭が三つ、私の周りに落ちた。

え？・・・え？な、なんで？そ、そんな。わ、私が？人を、殺したの？

「キヤーー！！！！」

お手伝い係の悲鳴が轟く。

残っていた男が私に襲い掛かってくる。

彼は器用に男の拳をかわし、首を真横に切り付けた。

それはまるで、思い切り振ったコーラの蓋を切り取ったように、血を吹きだした。

返り血を舌で舐めると、彼は言った。

醜く、醜く、恐ろしい笑みを浮かべて。

「どうだ？血の味は？」

ああ。望みが、出来ました。
考えないようにしてました。
でも、もう、耐えきれない。

死にたい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9378a/>

羽根が黒く染まる闇

2010年12月31日21時41分発行